

互いを信頼できない集団に協力が生み出せるか

— XW村を事例とした事件史の分析

張 静

(訳 岡本恵子)



テーマの背景

社会学の研究では、組織統治や公共財に対するソーシャル・キャピタルの役割は研究者から常に注目されてきたが、その性質についてはそれぞれの経験によって明らかな理解の相違が存在する。ソーシャル・キャピタルを一般性のある公的資源と捉え、社会発展といった公務における役割に注目する学者もいれば、何らかの社会的関係における特定の資源と見なす学者もおり、その場合は個人レベルで見た職業面の流動性や、事業活動への対人的サポートという役割に注目している。これらの視点は、中国の社会研究の中では非常によく見られる。両者の大きな違いは二つ

あり、一つはソーシャル・キャピタルを特定の関係を識別するための条件とするかどうか、もう一つはその対象となる受益者の範囲をどこまで想定するか、という二点である。ここで軸になるのは、こうした資源をどの範囲まで共有できるのか、またそれは公共財なのか、という問題である。

前述した違いは、いくつかの代表的な観点にも見受けられる。例えば、「ソーシャル・キャピタルとは、社会生活の特徴であるネットワーク、規範、信頼などを指し、これらによって参加者はより効果的に協働し、共通の目標を目指す……つまり、ソーシャル・キャピタルとは社会的なつながりであり、それに伴うルールと信頼である」という見方である。また、「ソーシャル・キャピタルは、社会ネッ

トワークに埋め込まれた資源である」や「友人、同僚、一般的な知人を介して、金融資本や人的資本へのアクセスを得ることができる」、⁽⁴⁾「個人は各々が構成員という立場を通じて、ネットワークやより広い社会構造の中で希少資源へアクセスする能力を高めることができる」⁽⁵⁾などの見方もある。一般性と特定性という二つのソーシャル・キャピタルの性質と役割は似ているのだろうか。多くの学者は、前者がポジティブな効果を持ち、これらが充実する社会は経済発展を遂げやすいということに同意している。⁽⁶⁾これに対し、後者のソーシャル・キャピタルは、一般性が低く特定性が高いという特徴を持つため、中国の民間経済の発展を促すなど、ある面ではプラスの効果を発揮する場合もあると考えられている。ある学者によると、宗族が存在する地域ではインフォーマルな関係を通じて、情報提供、利益分配、財産権保護などが効果的に行われるため、こうした土地では郷鎮企業がより活発化しやすいという意見もある。⁽⁷⁾

特定のソーシャル・キャピタルに境界性はあるのか。どのような問題の解決が難しいのか。また、どのような条件をクリアすれば、一般的なそれへと広げていけるのか。こうした問題は、これまで実証研究ではあまり議論されてこなかった。一般的ソーシャル・キャピタルという観点からすれば、それが限定的な関係性という枠に縛られるのであれば、まずは公的な関係性を親族、友人関係、贈与など、

社会に散見される私的あるいは特別な関係性に変化させない限り、より開けた公共の領域へ押し広げることが難しいと考えられている。⁽⁸⁾しかし、こうして構築された「公共」の信頼と協力は、やはりその対象を区別して使い分けることが前提にされている。つまり、「特別扱い」への期待と約束という動機付けを強めるため、それ以前とは異なる関係性が形成されただけに過ぎず、性質の上ではまだ一般性と公共財の側面を具えたソーシャル・キャピタルとは言えない。同様に、社会秩序の面では、もし一部の組織がレントシーキングや権力組織と特別な結びつきを持つことで特別扱いを求めるのであれば、そうした組織間での信頼度や協力度の高さは必然的に他の組織への不信につながり、よりオープンなソーシャル・キャピタルを失わせ、やがては社会の対立さえ引き起こしかねない。こうした状況下では、ソーシャル・キャピタルの共有性と特定性との間に矛盾した関係がある。

特定のソーシャル・キャピタルは、社会的な関係が存在する所であれば自然に生み出されるが、その特定性と共有性が共に弱まった場合、一般的ソーシャル・キャピタルはどのように生み出されるのだろうか。こうした問いは、社会環境や文化環境が絡むため、悲観的に感じる人も少なくないだろう。孫文は晩年、中国人が宗族主義を崇拜していること、そうした結末が宗族間だけに留まることを批判

した。⁹⁾また、アジアの伝統社会に見られる結束は、特殊な庇護関係として特徴づけられる、と指摘する学者もいる。

彼らは、アジア社会では対人関係の拡張性と上方到達可能性が他の社会に比べて強いが、公共生活において誠実さと協力がやや欠けていることに気がついた。これらの説明から、一般的ソーシャル・キャピタルは必ず生成される現象ではないことが分かる。ある研究では、ある文化圏が社会的・文化的な基盤を欠き、その土地特有の社会構造やイデオロギーと馴染みにくい場合、そうしたソーシャル・キャピタルの形成が困難だと考えられている。そのことを示す多くの例として、中国の基層レベルでは、産業資本の地方への進出など、外からの新しい組織的ルールが地元民の信頼と協力を得られず、その行き違いからくる緩やかな抵抗によって失敗に終わることもある。¹⁰⁾

ここで注目すべきは、前記のような社会的・文化的環境の中で、公共財としてのソーシャル・キャピタルはどのように生み出されるのかということである。外からもたらされるのか、あるいは内から生み出される可能性があるのか。

これに関する多くの研究が、ソーシャル・キャピタルの存在はその発展に適した制度をより効果的に機能させ、人的な障壁を減らし、社会ルールの運用コストを下げることを認めている。ここでは研究者は、ソーシャル・キャピタ

ルが存在する水準を社会的な信頼と協力の度合いを前提とした独立変数と捉え、そこから制度運用の有効性を説明し、制度ルールにはそれに適したソーシャル・キャピタルの社会的・文化的環境が不可欠だと考えている。例えば、ソーシャル・キャピタルや地域との強いネットワークも有する有力者（昔からの指導者、首長、宗族の長老など）は組織動員力は高いものの、逆にこうした土地では、その土地のエリートが変革的な役割を果たさない限り、上意下達のルールの多くが形式化した実行困難なものになりがちで、真のガバナンス効果が発揮できなくなる。¹¹⁾こうした考え方のロジックは、ソーシャル・キャピタルが一定した不変の性質というだけでなく、それが成長・進歩する（growth and improvement of social capital）ことを示唆し、とりわけ特定性から一般性への変容は、ある意味で「死刑」を宣告することであり、不利な社会的・文化的環境の中で一般的ソーシャル・キャピタルがどのように生み出されるか、という問いには答えていない。

こうした問いに対する答えは、特定の文化的・社会的環境を絡め、事実を踏まえて実践を掘り下げ、それが果たして内側から生み出されるのか、またどのように生み出されるのかを見据えなければならない。そのため、問題意識においては、本来の因果関係を逆転させた問いかけが求められる。つまり、もし一般的ソーシャル・キャピタルが社会

陳情村の二〇年

のネットワークに根ざした信頼と協力といったリソースであるとするれば、これらは人々の活動によってどのように生み出されるのだろうか。例えば、互いを信頼しない人同士の間には信頼と協力を促すこと、すなわちソーシャル・キャピタルを成長・進歩させることは果たして可能なのだろうか。分裂し激しく対立する集団間において、協力が生まれるための条件や原動力はどこから来るのか。どうすれば生まれるのか。その先はどうなるのか。中国南部にあるXW村の事例は、実際の出来事として、これらの疑問に答え得るかもしれない。

こうした問いの理論的な意味合いは、制度ルールと社会基盤（ソーシャル・キャピタル、認識、あるいは組織構造）の関係性、とりわけルールを変えるための動機付けがどこから来るかを明らかにし、ソーシャル・キャピタルが広がるメカニズム、すなわちその変化や更新の原因と道筋を探ることにある。そのため、このようなローカルケースの事件史を分析し、中国の基層実践の中にこのメカニズムを見出し説明することで、協力行動の向上という一般的社会学分析が進むことに期待を寄せたい。こうした解釈が成り立つのならば、建設的な活動を通じて、人々は自治ルールを改善し、より良い社会秩序を構築することができ、悲観を希望へと転じることができる。

XW村は、中国南部のZCH市SHT鎮にあり、面積はおよそ四平方キロメートル、六〇〇世帯余りが暮らす人口三千人を超える村である。村民の主な収入源は、パート労働、自営業、村からの集団配当である。集団配当の財源は、村の共有地や建物の賃貸料（または請負料）であり、毎年年末に村民全員に分配されるのが習わしになっている。村にいくつかの都市部へつながる幹線道路が通るため、こうした好条件を活かし、一九九〇年代には商業開発ブームに沸き、通りに構えたホテルやオフィスなどの建設プロジェクトが次々に実施された。これらのプロジェクトは集団資産だったため、村民は毎年の配当が大幅に増えることを期待していた。

しかし、現実には厳しいものだった。この二〇年、ホテルやオフィスは賃貸や請負に出されたが、常にいざこざが絶えなかったため、こうした資産を誰も上手く運用することができなかつた。村民からは、土地の取用や立ち退き、物件の賃貸、工事の請負、収益の分配などをめぐって、さまざまな疑問が続出した。次第に問題が積み重なり、集団間の対立や幹部との対立へと発展していく。幹部の着任や業者の立ち入りが村民によって度々阻止され、各レベルの行

政部門へ陳情が再三行われた。一九九四年以降は、こうした対立が二〇年以上続いたことで、XW村の幹部と村民との緊張関係は広く知られるようになった。

村民の不満の理由は二つあった。一つは、土地取得をめぐる政府補償金の使途が不透明なこと。ある村民は「経済開発区の道路工事の時に、村から一二七七ムーの土地が収用され、一ムーあたりの基準補償額は一万五〇〇〇元だったが村民には配られず、それなのに返還された土地は未だにどこにもない」と振り返っている。二つめは、宅地取引の不正さである。経済開発区の建設以降、村の土地価格は二倍になり、大小六〇棟分ほどの住宅地が村民へ売り出された。「どこも同じ値段だったが、開発区や交差点の近く、道路沿いといった最も価値がある場所は、村の幹部やその親戚が先に買い占めた」と話す。こうして古い問題が解決されないまま、新たな問題が次々と出てきた。この二〇年、村民からの陳情は、郷・鎮・地区・県・市委員会・省委員会・中央政府へとエスカレートし、その焦点は常に村の公共財産の用途と分配にまつわる苦情である。これらの取り扱いをめぐり、村内で二つの派閥が生まれ、村幹部がそれぞれ一派に属し、同じ派内の村民からの支持を得ている。

これらの派閥対立は、村の宗族の関係性と密接に関わっている。村民の大半が「郭」姓を名乗り、古くは同じ一族

だった者の末裔とされる。しかし、同姓とはいえ一致団結とはならず、両派はそれぞれの利害をめぐり、郭氏の二つの「堂」（訳注「父系の親族集団」）としてそれぞれ結束を強めた。各派の中心人物が幹部に就任し意思決定を行い、それぞれ派内の村民を守ることで支持を得ている。上級政府は「バランス」への配慮から、彼らが代わる代わる村幹部に就くことを黙認していた。しかし、一旦上に立つと、皆が自分の親戚へ便宜を図ろうとするため、もう一方の派閥がそれを受け入れずに新たなグループが幹部に就任するという流れになり、その度に彼らと村民との間には緊張関係が生まれた。一方の派閥の村民がもう一方の派閥の幹部と対立し、公的資源をめぐる支配権を取り返そうとするのだ。そのため、それぞれが幹部になる度に足の引つ張り合いが起き、協力することができなかった。

内部の者にできないことが、外から来た者にできるのだろうか。郷鎮政府は、書記として村へ幹部を送り込もうと二度試みた。彼らは村と個人的な利害関係はなかったが、功を奏しなかった。村民は相変わらずそれぞれの「堂」の下に結束し、誰も言うことを聞かなかったため、外から来た彼らに全く打つ手はなかった。この確執がなくならない限り、村が所有する資産の賃貸や請負は何年経っても不可能だった。毎年年末になると、幹部は土地を売却した配当に頼るしかなかったが、公的資産が減り続けることで、村

民からまた新たな陳情が出される。こうして、この村では、長年にわたって行きつ戻りつの陳情合戦が繰り広げられてきた。

両派の争いは長年続いたが、その本質はいつも同じだった。つまり村民は、多くの富とチャンスを自らの親類縁者だけに与え、ほかの村民をないがしろにする「悪者」が力を持つことに異を唱えているのだ。そうして相手を追い落とし、こちら側の人間を担ぎ出すが、また数年もすると相手側から同じようにねじ伏せられる、ということが続いた。こうした堂々巡りが続き、ルールは変わらず人だけが変わり、やがては誰も彼もがダメになり、村民が互いに恨みつらみと不信感を抱き合うようになった。一九九九年に初の村民委員会幹部の直接選挙が行われたが、両派は相手側の裏工作に目を光らせながら、それぞれの候補者を擁立した。こうした対立が暴力沙汰へと発展しかねないため、政府は「秩序の維持」として警官四〇〇名を派遣する始末になった。二〇〇〇年になり、新たに就任した市委員会の書記が村へ視察に訪れたところ、逆上した村民に三日間取り囲まれ、問題が解決するまでは市内へ戻さないと抗議を受けた。二〇〇五年、第三期村民委員会主任が直接選挙で選出されたが、前任者から公印の引き渡しを拒否され、新任グループはそのまま三年間活動した。「公印のためだけに一年半も費やした」と話したが、結局、政府に申請して

作り直してもらうよりほかなかった。

「旭長になって十数年だが、XW村へ行ったのは一度や二度ではない。毎回やることと言えば、省委員会まで陳情に行った村民を送り届けることだけだった」。

こうした争いは、誰の得にもならなかった。誰が公有物件を運用しようと必ず横やりが入り、契約している借主はこれらの採め事に対処しきれず、事業を断念せざるを得なかった。その結果、村の集団資産は長年放置され、思うように運用できず、かと言って何の決断も下せないままだった。村民はと言えば、会議をすれば争い、争えば物事が決まらず、決まらなければ実行できず、実行できたとしても横やりが入る、といった具合である。この二十数年、XW村は「開発のジレンマ」に陥り、基層のガバナンスでは解決できないほど行き詰ってしまった。

新たなルールへの試み

二〇一四年の初め、村外で働いていた青年G氏が開発のために村へ戻ってきた。学歴はさほどなかったが、長年多くの都市で商売していたため、豊富な経験と高い見識があった。市場を渡り歩いたビジネス経験から、資産の価値や協力のメリットは理解していたものの、根深い確執を持つ二つの派閥をまとめるのは容易ではなかった。Gが同級

生に現状を打ち明けると、彼らは公的資産が浪費されることを憂い、中には若い世代が現状を変えるためにとGを村民委員会の主任選に立候補するよう勧める者もいた。

Gは村内には親戚がおらず、家族は村外で暮らしていた。村で過ごした期間が短く、どちらの派閥にも関わっていないかつたため、これまでの負債や利益をめぐる争いにも関与せず、「比較的クリーン」であった。二〇一四年一月、八五%の票を得て、Gは村の主任に選出された。就任早々に議案を出し、村の保有資産の請負と賃貸を速やかに進めようとした。しかし、派閥が厳しく対立する中で、どうすれば大多数の村民の賛成を取り付けることができるのか。弁護士と同級生が勧めたのは、「権限移譲」という幹部自身の意思決定に代わって契約を用いるというやり方だった。

この方法を試そうと、村へ戻るとまず大家屋を改装し、「村民議事庁」と書かれた看板を掲げた。村内六〇〇世帯のうち、家族の規模に応じて五〜一五世帯あたり一名ずつ代表者を置き、六九名の代表者を構成した。議事会は村の党委員会と村民委員会の両委員会（以下「両委員会」と略す）によって招集され、発言者席と代表者席のほか、監督者席、列席者席、傍聴席が置かれた。村民代表ではない支部委員や合作社の主任も出席することができる。その場合、提案や議論する権利はあるが、議決権は持たない。議

事会はその都度行われ、議題は両委員会から提出されることもあれば、ウィーチャットのプラットフォームに寄せられた村民の声の中から選ばれることもある。大きな議論を呼ぶ案件は必ず会議にかけられ、代表による討議と投票によって決められる。議案は三分の二以上の賛成で採択され、代表者全員がその場で契約書へ署名あるいは拇印を押して確認を行う。その後、決議案は法務担当者の審査を経て公表され、その模様はウィーチャットのプラットフォームでライブ配信されるため、議場の外にいる村民全員がスマートフォンでその様子を見ることが出来る。「XW村議事規則」には、決議案は採択されると決定事項となり、村の両委員会はその実施に責任を負い、「いかなる人物も、許可なく変更あるいは別の決定を下すことはできない」と定められている。

この議事会は、村の意思決定を担うプラットフォームとして、開発計画、条例改定、経済プロジェクト、請負案件に関わる議題を扱っている。また、多額資金の分配、集団借入による負債、資産の取扱い、村の土地・家屋の賃借、電力・水利・道路・パイプラインへの融資、建設事業、物件や土地の補償割当など、集団資産や村民の関心事に関わるあらゆる事柄が議事会に持ち込まれ、まず審議と投票を経て、議事契約書を作成することで政策決定が行われている。この前代未聞の変革は、当初は両派の争いが続いたため

上手いかず、マイクの奪い合い、物や液体の投擲、発言者への野次、施設の破壊行為、他代表への入場阻止などが起こった。こうした行為に対し、「XW村議事規則」ではサッカークのペナルティ制度に基づき、不適切な行動には警告カードが出され、イエローカード二枚またはレッドカード一枚でその代表者は議決権が一度停止される。これ²¹で、公式な場でのオープンな話し合いがなく、内輪のルートや宗族のつてなど身内だけで物事を進めることに慣れてきたため、多くの代表は新しいルールに慣れるまでに時間を要した。彼らの多くが、相手と腰を据えて協力し合い、相手側の提案に賛成票を投じることには大きな抵抗感があつた。

しかし、議事規則が強い効果を發揮するにつれ、次第に各派の代表者は、こうした衆目の中で次期再選を果たすには物事を潰すのではなく成し遂げること、破壊ではなく建設していかねければならないことを思い知る。やがて、次のことに思い至る。喧嘩するよりも発言に気をつけ、これまでのやり方を改め、テーブルの下から上へ、裏舞台から表舞台へ、罵倒から道理へ、こうして相手を説得してこそ支持票を獲得することができる。ルール自体は中立である。イエローカードは、属する派閥ではなく行為に対して出されるものである。村民代表は、意外と早く新しいルールに慣れ、村民からの書き込みコメントというプレッ

シャーも相まって次第に自らを律することを学んでいった。こうした積み重ねから、対立では何も問題は解決せず、かえって評判を落としかねないことを知る。派閥争いの熱は徐々に冷め、主導権を争うことへの無力感すら生まれ始めた。激しい論争は続いたが、それでも何とか双方は同意して協議できるまでになった。

二〇一四年から二〇一六年初めまでの新ルール導入から一年余の間に、XW村では一六回の会議が行われ、三八の議題について話し合われ、うち二九が投票で可決し、一つが否決され、八つは議論が紛糾したため保留（未決議）された。可決された二九のうち、二三が実施された。あらゆる議題がすべて決議されたわけではないが、二年足らずの間に議事会が頻繁に開催され、多くの問題解決に当たってきたことは明らかである。こうした平和的な合意形成という方法で、長年にわたって対立し放置された集団資産を一つずつ再生させることができた。公的資産の収益が生まれ、村の収入が増えたことで、年金の配当、高齢者福祉、環境面と衛生面の整備、セキュリティ設備への投資が年々増加していった。

こうしたことから、両委員会の村民からの評価は明らかに高まり、議事会で議論を経たプロジェクトにかつてないほどの満足度が寄せられた。これには幹部が大いに喜んだ。長年、陳情が続いた村がついに陳情がゼロになり、

「悪者」扱いされる心配がなくなったからだ。村民も大喜びである。村の重要決定の結果がオープンにされることで、「阻られる」心配がなくなつたからだ。村の両委員会は、こうした進め方が正しかったことに驚いた。と言うのも、決議の手続きと実施のプロセスで、村民から妨害を受けることが全くなくなつたからである。このようなことは、過去二〇年間で一度もなかった。この経験から、村の幹部は、村民の信頼と協力は幹部が決定権を持つことで生まれるのではなく、幹部自らが示したルールを守り、村民代表が取り決めた契約を認めていくことで生まれるということを学んだのである。例えば、あるビジネスマンが村の主任に土地購入の話の内緒で持ちかけたとして、「私はボスではないので何ともできません。議事会を通してもらわないと村民と揉めることになるので」と苦笑いして答えるよりほかない。

行動を変える

議事会が軌道に乗つたことで、いくつか大きな変化がもたらされた。

一つは、意思決定のルールがアップデートされたことで、二〇年以上続いた陳情が姿を消した。新しいルールでは、議事会は意思決定の機関であり、両委員会は決定事項

の実施を担っている。幹部と村民代表は共に議案を提出することはできるが、意思決定は審議と投票に委ねられる。つまり、意思決定の主体が数名の幹部（あるいは派閥の代理人）から代表機関へと変わり、意思決定権が個人から複数の代表からなる新組織へと移譲された。幹部の役割は、単独の意思決定者ではなく議事会の招集者となつた。そうになると、彼らが公有資産を独占するのではという疑念が払拭され、逆に村民代表が公務を執り行う責任が高まつた。ある村幹部は、「元々、悩ましかったです。誰も代表になつたがらなかつたし、誰がなるうが皆は気にも留めないし、誰だつて会議に時間を割かれなくなつた。だから暇なおばさんが選ばれたというだけです。今では、代表者が色々決めることになつて、皆なりたがるようになりました。最近では、村の代表は六九名から八五名に増えたんです」と語つた。幹部は一樣に、個人が意思決定を行う難しさを感じていた。なぜなら「そんなことをすれば、人様の怒りを買う」ことになるからだ。議事会ならば、そうした怒りを買うことなく、村民が理性的に意思決定に参加できる場となり、これによつて長年続いた陳情と苦情は姿を消すことになつた。

二つめに、人と人との間での情報の受け渡しの在り方が変わったことがある。これまでの閉じられた話し合いから開かれたものへと変わり、その全てのプロセスを映像で見

ることができる。情報の流れは、宗族間からパブリックな領域へと広がった。村民は、ウィーチャットのプラットフォームを通して議案の情報を手に入れることができる。

会議が行われている動画を見てその信憑性を確認し、最終的には代表の捺印済の決議をネット掲示板で確認することができ、あちこちへ出向く必要はないのである。こうした議論を見ることで、村民はさまざまな事実を知り、それらと比較して誤った情報を正すことができた。かつての内輪間で伝えられた情報は鳴りを潜め、一方的な情報が引き起こす争いも勢いを失い、情報を独占しようと躍起になる人々の力も次第に弱まっていった。

インタビュアー…議事会に期待することは何ですか？

村民…自由に発言し、どんな問題でも出し合って、自分の意見が言えて、議事会の机の上に材料を揃えて、みんな決めて、その結果がきちんと見えること。どんなことでも投げかけるから、議論は白熱しますよ。^{（声）}

インタビュアー…代表になりたいといった思いはありますか？

村民…選ばれればなりですよ。議事会で活動できるとなれば、みんな色々頼んでくるだろうし。^{（声）}

三つめに、庇護関係を通じた公的資源へのアクセスが難しくなったことである。これまでの意思決定メカニズムとは異なり、議事会は六〇〇以上の世帯から選出された代表

者で構成されているため、特定の一派が掌握することになり難しくなった。村民からの意見を吸い上げる主な方法は、今では選出された八五名の代表者を通じたつながりへと変わってきた。代表者の間柄は、宗族内の庇護といった上下関係から、それぞれが同等の権限と責任を持った関係性へと変化を遂げた。話し合いのプロセスは動画配信され、村民はその成り行きを見守っている。こうした衆目の中、八五名の代表とそれに連なる六〇〇以上の世帯へ影響を及ぼそうとするならば、まず議事会の場で皆を説得しなければならぬ。ここを避けて通ることは、明らかに困難である。

四つめに、利害関係の在り方として、これまでの宗族内での投票や内輪の忠誠心による互恵的なつながりという動機付けが弱くなったことがある。代表はそれぞれが多くの世帯の立場を代弁しており、さまざまな意見・利害・事情が目に見える形でぶつかり合った場合、必ずしも私利私欲が幅を利かせられるとは限らない。例えば、村の公営住宅や公有地を占有する者が儲かるから渡したくないと言っても、その一派の意見を公然と支持することは難しい。それどころか、逆に篡奪者の共犯と見なされて、嘲笑され罵倒されかねない。こうしたことから、村民は「身内を庇うにも理がある」ことを次第に知り、個人でも集団でもその利

益が多くの人が認める公共の価値に合致してこそ人心を得られる、ということを理解するようになった。代表間に個人的な関係はなお残ってはいたが、こうした血縁関係が公務に及ぼす影響は目に見えて小さくなっていった。

五つめとして、権限保持者が資源をコントロールできる機会が減ったということがある。例えば、XW村には三棟の老朽化した建物があり、すでに二〇年以上も開発されないままだった。そのすぐ隣で開発が進められていたため、これを好機と見た開発業者は、宗族内の様々な人脈を探り、村民委員会に圧力を与え、老朽化した建物を再開発のために売るように迫り、三万平方メートルで八〇〇万円を超える買値を提示した。この取引が成立すれば、村の可処分所得は増やせるものの村民委員会の独断では決められないため、議事会へ議案を提出するほかに、開発業者を招いて代表者へ状況説明を行った。村民委員会と業者の双方は、協力しながら建物売却のメリットや価格面での譲歩について懸命に伝えた。しかし、村民代表の間で激論が交わされた末、最終的に建物売却の議案は否決され、賃貸に出すという決定だけに留まった。このケースは、公的資産の安易な流出を議事会が阻止しただけでなく、村の代表が幹部以上に強い意志を持って公的資産を守ろうとしたことが見て取れる。以前であれば、わざわざ開発現場に向向いて阻止し、激しい対決や陳情するよりほかなかったが、今で

はそこまでのコストを費やすことなく、議事会での話し合いで誤った意思決定を予め退けられるようになった。このことから、開発業者はもう人脈には頼れないことを理解し、「議事会で決定してもらおう方が、後々村民からの横やりが入ったりしないのでやり易い」と話している⁽²⁷⁾。

こうして、宗族を中心とした利権的な組織力は徐々に力を失い、長年続いたXW村の確執と対立は沈静化され、意思決定において派閥が主導権を握ろうとする動機付けも薄れていった。両派の代表人物へのインタビューでは、かつては一触即発の敵同士が今ではこの話題に触れるのも恥ずかしいと感じているという。XW村では、人も物事も特段の変化はないが、新しいルールを導入したことで結果は大きく変わった。村は混乱もなく、以前より落ち着いている。表面上、幹部の権限は弱まったが、彼らへの尊敬の念や威信はかえって増し、村民も彼らへ協力するようになったため、村のガバナンスを効かせやすくなった。上級政府が最も恐れていた二つのこと——社会の不安定化と党の指導力の低下——は、XW村では全く起こらなかった。新しいルールの実施からわずか一年余りで、「問題村」として広く知られた村は、省の民政局が認める「文明模範村」へと変わることができた。

なぜ従来のルールは崩れたのか

こうした議事会の運営によって既存の行動様式が変わり、協力から一般的ソーシャル・キャピタルの生成につながったとすれば、「なぜ議事会が生まれたのか」を掘り下げてみる必要がある。特に「なぜこのタイミングで村に生まれたのか」を考えてみたい。

よくある答えとしては、Gという村の主任が居たおかげで、XW村は良いリーダーに恵まれたというものである。一見すれば、二〇一四年の新グループ就任以降、確かにすべてが変わり始めた。しかし、その答えを過度に一個人や偶然性に帰結させるならば、結論としては誰かを捜すか誰かが現れるのを待つよりほかない。むしろそれは、主体的にルールをアップデートさせるという行動を否定し、一連のシステムティックな変化の奥に潜む問題や危機といった動因を見逃ごすことになりかねない。長い間、村は従来のやり方では問題に対処できずにいた。このことが、主任のGをはじめとする村民たちをこれまでに代わる新たなルールの試みへと突き動かした。

中国南部の多くの村では、歴史的に単一姓からなる村落が発展してきたため、宗族を中心とした社会構造が形成されてきた。それは家族と社会をつなぎ、公共財を分配する

ための組織的な仕組みである。人々はこうした社会的組織との結びつきを頼りに、利益によってつながるコミュニティを形成し、情報・資源・機会へアクセスし、宗族支配による調和を保ちながら互いに頼り合える安心感を得ていたのである。宗族は、利益を集結し調整する組織化された単位として、倫理面で血縁の結びつきを非常に重んじる。ここでは、年功序列が敷かれ、福祉・情報・ルールを内輪で共有する階層的な庇護ネットワークに似た内部構造が作り上げられている。ただし、親疎による分け隔ては存在する。なぜなら、これら共同体の目的は、宗族の利益を大きくし、資源を競い守り集中させ、宗族を最大限に引き立てながらその生存能力を高めていくことだからである。

こうした組織構造は、血縁共同体の意識としては、ごく自然であり、継続的な安定性を保つ効果的な在り方である。つまり、それぞれの能力を具えて力を結集させ、資源を守り、奪い、分け与えることで、その構成員の競争力と安心感を強化させていくのである。困難に直面すると、彼らは血の力を結集して利益をめぐるいざこざを解決しようとする。通常、地位が高い者がその任に当たり、必要に応じて武装化（歴史上によく見られる）あるいは陳情を組織化（現代によく見られる）し、相手側を弱めて制圧しようとする。これらの血縁間では信頼と協力が自然に生み出され、こうした豊かで特別なソーシャル・キャピタルは、特

定の社会構造の中で強さと調和を具えながら生成され続けてきた。これと同様に、XW村の社会構造も、長い間このような形で意思決定や問題解決に当たってきた。

しかし、新たな環境の下でこうした在り方が危機に瀕している。新たな環境とは次のような状況を指す。

第一に、経済的な要因としての価値の変化である。村の公的資産である土地や不動産の商業的価値が上昇し、本来の利用価値をはるかに上回っている。例えば、土地であれば農業開発業者へ、物件であれば農村観光業者へそれぞれ請負委託させれば、村民が自家用として使うよりもはるかに高い収益が見込める。こうした変化に対応できるのは、これらの価値が変化していることを見極められる人間である。それには、村全体の開発目標に則して集団資産を活用し、ビジネスチャンス逃すことなく、生産活動と事業活動を組織化させることができる農業企業家の存在が不可欠である。村内に集団の土地や不動産が多くあることは既知の事実ではあるが、経済的要因としての価値が変化した場合、村民が共有できる新たな利益をいかに生み出すかということが次の課題になる。

「この村には家は沢山あるが、どれも古い空き家です。土地は広いが、その土地をつなぎ合わせようもなかつた。昔はみんなの理解がなく、開発業者が開発をしま

うにもその場に居座ったり、周りを取り囲んだり、工事をさせまいと現場を封鎖したりして……随分とものたないことをしてきた……。思えば、村にある店の賃料が年間九万元ほどから七〇〜八〇万元まで跳ね上がった。それを目の当たりにしながら手をこまねいているだけなら、そのうちみんなが犠牲者になつてしま²⁸う」

第二に、村への改修開発基金が用意されたことである。国は、郷鎮へ向けた開発資金として五〇〇万元を割当し、老朽化した家屋の改修を促し、「美しい新村」建設を進めようとした。ただし、この基金は村民への補償には使えず、対象はあくまで家の改修者と定められていたため、「村民は自分たちで意見をとりまとめ、採めるようであれば取り止めにして、資金は引き揚げる²⁹」という状況だった。もはや、XW村は一つの内向きの経済単位ではなく、実際は大きな市場システムの一部として、政府やビジネスマンといった外部市場の様々なアクターや目標にビジネスチャンスをもたらす存在になっていた。こうしたことから、村は食べていくためではなく、より効率的な資源の活用を目指すようになる。そのため、彼らは一丸となって、土地や不動産などの資源を有効活用しながら収益につなげるという新たな課題に取り組む必要があつた。

中国では、農村の土地は村レベルが所有し、それを農家

へ割当して使用させるため、個人が勝手に処分や売買することはできない。したがって、使われていない土地に対して企業家が請負を希望した場合でも、その所有権は村の集団に属するため、使用権しか持たない農家が勝手に決めることはできない。また、村側も土地を貸すには、土地を使うすべての農家の同意を得なければならぬ。こうした土地制度では、土地を部分的に運用・開発するには高いコストがかかってくる。と言うのも、開発業者は農家一軒一軒との個別の取引が必要となること、また収益が増えると農家が集団で契約破棄するというトラブル（各地の実地調査から、市場価格の変動で農家が不利になると、結束してこうした行動を起こすことがある）に対処しなければならぬいからだ。このような対立のリスクを減らすため、企業家は、幹部に個人的な便宜を図ることを約束し、まず地方政府や村の幹部を説得し、村内の利害対立を解消するための仲介をしてもらい、その後には幹部と土地契約を取り交わすことが一般的である。この種のプロジェクトでは、通常は幹部が自由に使える公的資金が増えるため、資金不足の農村幹部にとつては願ってもない話ではあるが、それには村内の対立を「まるく収める」だけの力が求められる。過去にXW村では、一部の幹部による大失態があった。彼らが支持者である宗族の縁者に便宜を図ったことで、村が激しく対立し、ついには開発プロジェクト自体が暗礁に乗り上

げたのだ。

インタビュアー…なぜ、ここに投資することにしたのですか？

葡萄園の代表…これまで当社は多くの場所を検討しましたが、XW村に決めたのは、ここには議事会があったからです。我々が村民と直に接触しないので、余計なことをする必要がなかったからです。

インタビュアー…例えば？

葡萄園の代表…土地の賃借料は払いますが、各農家の苗木の補償については責任は負いません。当社としてそうした取り決めがないのですが、村の人たちは損をしたと感じるでしょう。そこで我々は村民委員会に相談し、議事会と村民の代表を通じて協議と説明の場を設け、最終的には問題なく解決しました。³⁰

インタビュアー…議事会がなければ、このプロジェクトは実現できたでしょうか？

葡萄園の代表…昔なら難しかったでしょうね。……我々が一肌脱ぐとしても、協力にはかなりのコストがかかります。当時の幹部と役人との関係性が不透明だったので、……やはり訴訟になれば強い後ろ盾がもの言いますから。良い土地は幹部がそれぞれ所有しているのです、それをつなぎ合わせるのは大変です。ですが、計画全体を考えると、分散した土地では上手く栽培が

できません。……役人は流動的で、一生この村の役人
でいることはありませんが、議事会は安定した組織だ
ということが分かったので、安全で安定した契約を結
ぶためには、我々としてはこうした組織の方が望まし
かったです。⁽³⁾

企業家はシンプルで、取引コストが高く、意思統一がで
きなければ、そこでの開発を諦めて他所を探す。しかし、
企業家でなければ、村の資源を外部市場のニーズに結びつ
け、より大きな収益を生み出すことはできない。もし彼ら
が手を引けば、村は「チャンスをつかみ損ねた」ことにな
るのである。

このような状況の変化は、意思決定において宗族の処理
能力を超えており、新たな問題に直面したことで、共同体
としての調整能力の限界が浮き彫りにされたのである。こ
うした限界については、まず目標の限界が挙げられる。財
産の所有から開発へと目標が変化した場合、宗族はそれら
を守ることは長けているが、開発させるには限界がある
ことが明らかになった。次に、業務知識の限界が挙げられ
る。宗族では意思決定者の多くが年長者であり、彼らは長
い間家業に従事してきたため、外の市場経済に関する知識
が乏しく、土地の価値を高める方法についての経験も不足
している。三つめに、与信管理の限界が挙げられる。これ
までの教訓から、商談は身内探しとは異なり、優れた経営

者を見極めるということが、彼らが血縁関係を見定めるこ
とに長けているという枠を超えていることが分かる。

市場競争に加わるには、村全体が協同組合のような「企
業」にならなければならない。しかし、宗族という組織が
持つ分散性・利己性・庇護的なネットワークといった特性
により、全体的かつ長期的な組織形成が妨げられてきた。
例えば、六〇〇世帯もの村民の合意形成をどのような組
みを用いて調整していくか。この二〇年間の対立と失敗か
ら、村の既存の組織構造は全体が協力し合うという面では
優れておらず、そうした役割としては失敗だった。新たな
状況に直面したことで、これまでの古い意思決定のルール
が行き詰まり、古いソーシヤル・キャピタルが機能しない
ため、変革を迫られ (be reformed) たことは明らかである。

公的な関係と倫理の構築

前述のように宗族を中心とした社会構造の危機は、これ
までの確実性や安心感を徐々に失わせ、血縁で結びつい
た忠誠心に綻びを生じさせた。その一方で、新しい世代の
村民の間では、血のつながりを超えた公共の利益の倫理的
地位が高まり始める。これは、村民が血のつながりを認め
なくなつたということではなく、親族間の助け合いという
私的な義務が失われたことでもなく、さらに宗族内での特

定的ソーシャル・キャピタルが打ち捨てられたわけでもない。むしろ、公務を扱う組織的な役割として、このようなネットワークが公財の提供や共有財産の管理等に及ぼす影響が次第に小さくなりつつあった。そのため、村民の利益に関わる公的な問題を解決しなければならぬ場合、宗族の結束よりも議事会に頼るようになる。これは、特定のソーシャル・キャピタルの公務における「資源」という意味合いが薄れてしまったことを示している。

例えば、XW村の議事会で葡萄栽培業者へ土地を委託することが決議されると、一部の宗族の年長者は「先祖代々の土地」にこだわり、これに反対した。しかし、彼らはあくまでも自家の土地の主であり、村民の多数決による決定を覆すことはできない。数年後には、両者の土地活用の効率性と収益性の差はますます顕著になり、こうした認識の違いが年長者の権威を脅かすようになった。また、二〇一八年に行われた議事会投票では、これまで村民が占有していた公営住宅や土地を返還し、環境緑化を進めることが決められた。ところが、長年この土地を使っていた高齢家族がその引き渡しを拒否し、自らが年長者で経験があることを盾に、議事会の決定に対して「ただ返さないというだけだ。私をどうする気だ」と怒り出した。この映像を見た村民は、彼らが皆の利益を無視していると口を揃えて非難した。やがてこの流れが広がり、世論の圧力はその子供

にまで及んだため、老人は子供に引き取られて一時的に村外に移り住むことになった。これを機に、その自宅裏の土地は取り壊されて回収されてしまった。戻ってきた老人がそのことを知ると、通りで罵声を上げ、議事会と決着をつけてやると息巻いた。そこで子供が「引き渡したのは私なのだから、私に言えばいいじゃない」と父を説得した。

このように、議事会のルールが大多数の村民に受け入れられた理由は、非人格的 (impersonal) な公共の倫理という基準が確立されたからである。この基準は抽象性を持ち、対象や関係ではなく行為自体にフォーカスしている。それは、これまで宗族内の倫理が重んじた人と人との関係性というロジックとは一線を画している。右記の例で言えば、双方が対立した時、子供は父親のために誰かとケリをつけたり、あるいは少なくとも沈黙か静観すべきだったが、本人は実際の行動で立場を表明した。このように、血縁という結びつきが将来的な庇護や安全に直結しなくなったため、世代間の上下関係を中心とした宗族の倫理観が若い世代へ与える影響は徐々に弱まりつつある。

インタビュアー…議事会が設立されてから、家族の活動はどうですか？

インタビュイー…かなり減りました。昔は一部の人が利権を得ていたので、家族がとてもしんどいられていました。…：：：議事会がこうした連鎖を断ち切ったんです。

……今では利益は均等になり、宗族の利益よりも皆の利益を重んじるようになりました。⁽³⁾

どのような新しいルールでも、中国の体制下では上位組織の承認なしに物事を進めることは不可能である。では、この村のルール改正は、宗族の支配権を喪失させるという上位組織の意図があつたのだろうか。否、もし宗族の結束力と体制が根本から対立していれば、長年の間、「交代統治」を村で続けさせることはなかつただろう。なぜ、郷鎮政府はこのタイミングで態度を変えたのだろうか。それは、二〇年間の陳情を目の当たりにして、組織面の不満を少しでも解消できる手立てがあれば、何でもやってみようと思つたからである。こうした上層部の安定維持という動機付けと、新たな試みが目指すところが期せずして一致したのである。このため、新しいルールは上から後押しされたわけでもなく、またこれまでの行動原理と大きく異なつていたにも関わらず、郷鎮政府はそれを静観する構えを見せたのだつた。やがて陳情が減り、秩序と安定が回復すると、彼らは村民委員会からの提案に耳を傾け、具体的な行政手段を講じて支援に回るまでになつた。

郷鎮政府としては、まずは黙認し、議事会が村民の意思決定の場として受け入れられるようになれば、この「実験場」を快く受け入れようとした。議事会という形が功を奏すと、それが「党の指導から離脱」することを防ぐため、

G氏は二〇一八年に共産黨員となり、同時に郷鎮の幹部候補として推薦され、正式に制度内での身分が認められるようになった。こうした形を「吸収」と呼ぶ。次に、郷鎮政府は、これまでの「先達者」に郷鎮の名誉職を与え、彼らがスムーズに退けるよう支援し、⁽³⁾年長者が村の事務的な事柄に干渉できないように離れさせた。これを「置換」と言う。こうしたやり方は、ルール改正が村の基層レベルの秩序を安定させ、さらに既存の行政システムと相容れないものではないということを示唆している。

デイスカッション

XW村における実践はなぜ重要なのか。そこからソーシャル・キャピタルについてどのような知見が得られるのか。

この事例は、社会資源としての特定のソーシャル・キャピタルは自然発生的な社会関係から生成・維持されるが、一般的ソーシャル・キャピタルの場合には、公共ルールのアップデートという一定の制度的条件を要する、ということを示している。XW村では、新しいルールによって（集団資産に関する）意思決定権の構造が再構成され、村民間に従来と異なる新しい公の関係という形が構築された。これにより、より広い範囲での村民間の信頼と協力という、

一般的ソーシャル・キャピタルが生まれる基盤となり得たのである。

こうした変化は、新しいルールを試すという行動に端を発し、そこには政治的選択（ウィーチャットで村民を動員して意思決定のルールを改正する）と組織的改善（議事会とプラットフォームをつなぐ）ことで公的な関係を構築する（という内容を含んでいる。これらの改善は自然に生まれたのではなく、内向きだった村が外部市場へアクセスするという条件の下、新たな焦点となるニーズが現れ、危機が重なった時に生み出される。村がより大きな経済ネットワークにつながるには、村の既存の内部資源が資本・経営者・市場という外部要因と競争性を持った選択的関係を構築することが不可欠であり、それによって共有財産の付加価値を上手く高めていくことができる。

これらはいくつかの初期条件である。村のルールを変える内的要因は、そこになお解決すべき難題があったからである。それらの問題に対して、どのように対応するかが重要である。特定のソーシャル・キャピタルを持つ血縁システムでは、身近で固い関係を組織化することで資源の支配権を競い合い、埒があかない対立を招き、かえって問題は解決されないままだった。こうした状況に直面する多くの村と同様、XW村も二〇年間も対立に悩まされ、大きく変わることはできないままだった。公的な問題を解決するに

はこれまでのアプローチでは限界があることを認識し、ここで初めて新しい方法で問題に向き合う原動力が生まれた。二〇一五年以降の変化はすべて新しい意思決定の形に由来しており、既存のソーシャル・キャピタル（宗族間の信頼と協力）にはほぼ由来していない（原因ではなく結果という意味合いで、それは公共問題に影響を与える役割すら果たさなくなつた）。この時点では、村における一般的ソーシャル・キャピタルは、まだ猜疑心・対立・不信任に覆われた弱々しい存在で、協力とはほど遠かつただろう。しかしこうした状況は、新しいルールの実施に必ずしも影響しなかつた。それどころか新ルールが運用され、対立する村民同士が協力し、議事会が運営されるようになること、一般的ソーシャル・キャピタルがかつてないほど大きく成長し広がった。なぜなら、かつての特定のソーシャル・キャピタルでは、公的資産の運用をめぐる意思決定の危機という新たな課題に対処できないことは明白であり、皆がその代替案を模索していたためであった。

基層でありがちなケースと違い、XW村の新ルールは紙の上で設計されたものではなく、実行を伴ったものであった。まず組織体制から着手し、意思決定権のバランスを変えることで、長年続いた意思決定をめぐる行き詰まりを解決した。この村に限って言えば、彼らのやり方は、従来の村民代表大会という制度と形は似ているが中身は異なる全

く新しい試みだった。両者の大きな違いは、従来の制度では実践（表記ではなく）において、意思決定における権力構造について真に触れることがなかった点である。村民は「以前は、村民委員会の決定を聞くためだけに代表者が会議に来ていた。今では、自分たちがそこで物事を決めていく」と話し、人々は新しいルールによって自分たちが「真の役割を果たしている」ことを再認識した。このように、新しいルールは、それぞれの参加者間に新たな関係や行動基準を作り上げ、疑いや心配を減らし、その結果として協力が生まれる基盤となったという点で本当の違いがある。したがって、ルールをアップデートすることは、一般的ソーシャル・キャピタルが生み出される源泉と保証であり、その逆ではない。

XW村では、少しの適応段階（初期のいざこざ）を経て、新ルールは予想より早く支持を得ることができた。よくある拒絶反応は見られず、村民へのインタビューでも以前より公平性を欠いていると考える者はほとんどいなかった。この点は、議事会がこれまででない信頼性を具え、そこから対立する集団間の協力が進み、ソーシャル・キャピタルが建設的に広がったことにつながる。

新しいルールは、何故これまでのような地に足の着かない形式的なパフォーマンスに陥ることがなかったのだろうか。それは、村で議論されている議題はすべてが村民の利

害に関わることで、彼らにとつての関心事だったためである。形式的な「協働」とは異なり、村民のニーズに添えることは、参加者を受動から能動へ変えるためのポイントと言えよう。村民は、「ルールがオープンで、内容への関心も高く、皆が腰を据えて話し合うことができ、ウィーチャットのプラットフォームで監視することで、そのプロセスを誰でも見ることができるよう、我々はしっかりと取り組まなければならない」と話し、議事会への強い信頼が見られた。³⁶ 特定のソーシャル・キャピタルと明らかに異なるのは、一般的ソーシャル・キャピタルでは信頼の対象は具体的個人ではなく、公的な制度ルールの運用を通じた共通体験である。

特定の文化的環境の下では、制度の改変には受動的な適応を強いられる。それは内からではなく外からもたらされるため、往々にして現場の認識と対立し、社会的基盤を欠くためという見方がある。しかし、XW村の事例を見ると、制度の変遷にはさらに典型的な特徴があることが分かる。その特徴は、競争性・内生性・変革性であり、実際の運用には次のような進め方を選択することができる。それは、ルールの再表明、権限の構成を調整、パワーバランスの変更、本来のエリート（宗族の長老）を敬遠、より多くのキャスト（八五名の村民代表とウィーチャットのプラットフォームへアクセスする村民）を動員、といった方法で

ある。これらによって、新たな支持者による連携を作り上げ、やがては従来のやり方が通用しなくなってくる。エリノア・オストロムのパブリック・ガバナンス論と照らし合わせてみると、外部経験によって、制度供給、信用できるコミットメント、相互監視という三つの要素が導き出されると考えるが、XW村の事例にはこれらすべてが存在していることに気がつく。これら三つの要素は、村のケースに当てはめると、議事ルールの設定（制度供給）、契約上の手形確認（信用できるコミットメント）、ライブ映像の配信と結果の公表（相互監視）という形で表わされている。しかし、村にはこうした「パブリック・ガバナンス論」の予備知識もなければ、外から来た人間に教えられたこともない。この村の孤軍奮闘の実践によって、同様の知見が生み出されたのである。村民にとって「手本」があったとすれば、それはよくある契約書への署名とサッカークの試合ルールであった。

こうしたことから、洋の東西を問わず、問題への対応や解決法を模索することがルールが変わるための源泉であることが分かる。村の新しいルールを支える社会基盤は、現実的な問題を解決する上で効果を発揮したのだ。こうしたルールができる以前は、個人（就任したての村主任など）が押し進めることも重要だったかもしれないが、一旦ルールができること、システムティックな相互制約が個人の役割

を超えて働くようになる。それが、対立する集団間に協力を生み出し、対立を減らし、意思決定と実施を円滑にし、幹部と村民との矛盾を解消し、共有できるソーシャル・キャピタルを大きくしていく、といった我々が目にした一連の変化である。こうした変化に対し、個人が役割を果たしたとは言い難い。その最も典型的な例が、コミットメントの向上である。議事会の決定について、そのあらゆる実施プロセスにおいて派閥や村民から妨害されることがなくなつた。この点は、G氏個人が村民両派の争いを収めたからではなく、明らかに前述の公共ルールがシステムティックに機能した結果であつた。

この新しいルールの基本的な役割について、専門的にはグループ・リレーションズに代わるものとしてパブリック・リレーションズが構築されたと表現され、公的資産の取り扱いをめぐる不確実性——情報の隠蔽、内輪の互恵関係、不透明な結果、憶測と支配権争いの激化——を確実性が期待できるものへと変えていったことが分かる。分かりやすく言うと、双方の村民が共に見える、話せる、安心できると感じられることを指す。こうして、XW村では対立する集団間に信頼と協力を生み出すことができた。

これは、ソーシャル・キャピタルが成長したことになるのだろうか。対人関係における信頼や協力は、その蓄積に時間を要するという意見もあるだろう。この意見に基づく

と、信頼と協力はその対象である人への理解に依るところが大きく、そうした理解には歴史・時間・経験が不可欠である。したがって、もしG氏が村を去れば、二つの派閥は争いを続けるかもしれないように、短期間で形成された協力関係は、必ずしもソーシヤル・キャピタルが広がったことを意味しない。こうした認識は、個人的な人間関係という限られた経験から来るものだろう。確かに個人や親しい集団内に高いレベルの「ソーシヤル・キャピタル」が存在することは間違いないが、共有可能なソーシヤル・キャピタルの性質はそれとは異なる。後者は公共財であり、個人や集団という関係を超えて共有できる性質を具え、公務の分野に適したものである。これまで見てきたように、以前のXW村では特定の「ソーシヤル・キャピタル」には事欠かなかつたが、それが公務を執り行う上で「確実性を高める」という役割を果たすことはなかつた。一般に特定のソーシヤル・キャピタルは、人に対する理解、すなわち長期的な認識によって蓄積された信頼と協力がなければ成立しない。一方、一般的ソーシヤル・キャピタルは、ルールに対する理解に基づいており、合意し共有できるルールがあれば、たとえよく知らない相手や敵であつたとしても、ルール違反が許されないあるいは違反によって罰則が下されることが確信できれば、そこには基本的な信頼と協力が生まれる。例えば、中国でも長い歴史を持つ民間での契約

締結など、このことは多くの事実によって証明されている。

したがって、公共ルールの普及は、一般的ソーシヤル・キャピタルの成長につながる。公務における議題の特徴として、さまざまな人脈、それぞれの価値観と利害、参加者の流動性、変化する機会状況などがある。こうした複雑さを前に、経験則に基づいてあらゆる人を理解しようとするコストは非常に高く、実現はほぼ不可能である。したがって、人への信頼から派生した特定のソーシヤル・キャピタルとは異なり、一般的ソーシヤル・キャピタルは、ルール自体への信頼、ルールに対する共通合意と共通経験から来る信頼、に根ざしており、異なる価値観や利害関係を持つ人々が協力し合うための基盤を生み出すことができる。こうしたことから、これら二つのソーシヤル・キャピタルとは、それぞれが異なる原理に基づいた二種類の社会関係資本である、という認識を導き出すことができる。それぞれ生じるメカニズムが異なるため、公務に対して担う役割も異なってくるのだ。

ヨーロッパは政治的に分断された社会のため、近代的な議事制度が生まれやすかつたとされ、そうした歴史的経験と比較した場合、XW村の事例にさらに次の点を補足することができる。新しいルールができるには競争環境が不可欠だが、分断が必ずしもルールのアップデートという結果につながるとは言えないため、これら条件が揃つたとして

も、必ずしも生成のメカニズムが働くとは限らない。また、中間のメカニズムも重要である。もし、従来の方法で解決できないというジレンマが生じず、さらに問題解決のために代替できるルールを想定できない場合、分裂が泥沼化し、覇権争いが長期化してしまうことがある。XW村が二〇年以上もそうだったように、対立する双方は、対峙しながらも親疎による差別化という同じ原理を有している。そのため、こうした対立は、意思決定における腐敗と戦っているように見えるが、腐敗の再発をなくす新たな原理を体系的に打ち立てようとしているわけではない。つまり、争いばかりしているが、それぞれの原理をめぐって争っているわけではなく、対立ばかりしているが、それぞれの原理をめぐって対立しているわけでもないのだ。すなわち、ヘーゲルが言う、(進歩の)歴史と言うより(その場の)循環である。³⁹⁾

以上のように、この問題では、制度ルールの運用がブレイクスルーしたことで自己変革へつながり、集団間の対立や覇権争いの連鎖を断ち切り、基層社会のガバナンスの質を向上させることができるという政策的な可能性を示唆している。

〔付記〕本稿は、二〇一六年から二〇一九年にかけて実施した調査に基づいている。この研究は、教育部北京大學社会

学研究所の「基層統治——組織、観念と方法」をテーマとした重大プロジェクトの支援を得て実施された。事例研究にご協力頂いた中山大学の肖浜教授、広東行政学院の陳曉運教授に謝意を表したい。また二〇一九年に開催されたワークショップの際、ソウル大学のハン・サンジン教授より英文ドラフトにコメントを頂いたことにも謝意を表したい。この中国語版は、英語版から大幅に改訂を加えたものである。本版は二〇二〇年九月刊行の上海大學『社会』秋号に初掲載され、同誌の匿名査読者の方々から貴重なご指摘を賜ったことに感謝したい。ただし本稿における見解や事実関係については、筆者が責任を負うものとする。

注

- 〈1〉 帕特南『讓民主転起来——現代意大利的公民传统』王列、頼海榕訳、江西人民出版社、二〇〇一年 (R. D. Putnam, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, 1993, 邦訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』河田潤一訳、N T T出版、二〇〇一年)、辺燕傑ほか「企業的社会資本及其功效」『中国社会科学』第二期、中国社会科学院、二〇〇〇年、Li Y. Tsai, *Accountability without Democracy: Solidary Groups and Public Goods Provision in Rural China*, Cambridge University Press, 2007.

〈2〉 帕特南「調来調査——美国社会資本的奇怪消失」托

- 「徳・多納、肯尼斯・赫文『社会科学研究——從思維開始』、潘磊、馬帥超、李滌非訳、重慶大学出版社、二〇二〇年、一二六頁(R. D. Putnam, "Tuning In, Tuning Out: The Strange Disappearance of Social Capital in America," *The Elements of Social Scientific Thinking*, Cengage Learning, 2013)。
- 〈3〉林南「社会関係の種類と効益——对中国大陸、台湾和美国の比較研究」北京大学費孝通記念講座演講稿、二〇〇八年、一頁。
- 〈4〉Burt R., "The Contingent Value of Social Capital," *Administrative Science Quarterly*, 1997, 42(2), pp. 339-365.
- 〈5〉Portes A., "Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology," *Annual Review of Sociology*, 1998, 24, pp. 1-24.
- 〈6〉帕特南、前掲『讓民主転起来——現代意大利の公民伝統』。
- 〈7〉彭玉生「中国転型経済中的宗族網絡和私営企業」香港中文大學華南支持計畫、中国研究服務中心工作論文、二〇〇五年。
- 〈8〉張静「家庭主義与公共性原則」田中重好主編『公与私——比較研究』名古屋大學講座文集、二〇一二年。
- 〈9〉孫中山『三民主義』一九二四〜一九二五年編集・印刷、上海紅十字歴史文化陳列館所蔵。
- 〈10〉S. N. Eisenstadt and Louis Roniger, "Patron: Client Relations as A Model of Structuring Social Exchange," *Comparative Studies in Society and History*, 1980, 22(1): 42-77.
- 〈11〉庇護関係とは、ひとつの役割間の交換であり、双方における便宜的な友好関係の特殊ケースとして定義することができ、社会経済的地位の高い庇護者とその影響力と資源を用いて、もう一方の社会経済的地位の低い被庇護者へ保護や利益を与える。その見返りとして、被庇護者は一般的な支援と援助(個人的なサービスを含む)を庇護者へ提供する。James C. Scott, "Patron-Client Politics and Political Change in Southeast Asia," *J. American Political Science Review*, 1972, 66(1), pp. 91-113を参照。
- 〈12〉ボンシモン・ジエネレーター (position generator) を用いて、個人的な関係によって得られるソーシャル・キャピタルの特徴である二つの基準を数値化した。拡張性としては、サンプリングした職業の数(異なる産業間の関係)、上方到達可能性としては、社会的地位の高い職業への道筋(異なる階層間の関係)である。林南「社会関係の種類と効益——对中国大陸、台湾和美国の比較研究」北京大学費孝通記念講座演講稿、二〇〇八年、二頁を参照。
- 〈13〉弗蘭西斯・福山『信任——社会道德与繁荣的創造』遠方出版社、一九九八年(邦訳『信』無くば立たず——「歴史の終わり」後、何が繁荣の鍵を握るのか」加藤寛訳、三笠書房、一九九六年)、弗蘭西斯・福山『大分裂——人類本性与社会秩序の重建』中国社会科学出版社、二〇〇二年(邦訳『大崩壊』の時代——人間の本质と社会秩序の再構築』上・下、鈴木主税訳、早川書房、二〇〇〇年)。
- 〈14〉徐宗明「内外有别——資本下郷的社会基礎」北京大学

二〇一八年博士論文、印刷版。

- 〈15〉 K. Baldwin, “Ejected MPs, Traditional Chiefs, and Local Public Goods: Evidence on the Role of Leaders in Co-Production from Rural Zambia,” *Comparative Political Studies*, 2019, 52(12), pp. 1925–1956.
- 〈16〉 左雲敏「基層治理的有効性研究」北京大學二〇一九年博士論文、印刷版。
- 〈17〉 村民へのインタビューは、陳曉運、張文傑「鄉村有効治理——廣東範例」(未発表完成原稿、一九九九年、四〇頁)より引用。
- 〈18〉 広東省民生部の元役人へのインタビュー(二〇一四年)。陳曉運、張文傑「鄉村有効治理——廣東範例」(未発表完成原稿、一九九九年、五二頁)より引用。
- 〈19〉 郷鎮幹部へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈20〉 「XW村議事規則」印刷版、二〇一五年。
- 〈21〉 同右。
- 〈22〉 村の幹部へのインタビュー(二〇一六年、二〇一九年)。
- 〈23〉 郷鎮幹部へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈24〉 村幹部へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈25〉 村民Zへのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈26〉 村民Cへのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈27〉 農業開発業者へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈28〉 村民委員会主任へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈29〉 郷鎮幹部へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈30〉 葡萄産業園の企業代表へのインタビュー(二〇一九

年)。

- 〈31〉 同右。
- 〈32〉 村民委員会主任へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈33〉 郷鎮幹部へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈34〉 陳曉運、張文傑「鄉村有効治理——廣東範例」印刷版、二〇一九年、四二頁。
- 〈35〉 村民委員会主任へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈36〉 村主任へのインタビュー(二〇一九年)。
- 〈37〉 埃莉諾・斯特羅姆『公共品的治理之道』上海三聯書店、二〇〇〇年、第六章。(Elinor Ostrom, *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*, Cambridge University Press, 1990)
- 〈38〉 Mark Dincecco and Yuhua Wang, “Violent Conflict and Political Development over Long Run: China versus Europe,” *Annual Review of Political Science* 2018, 21, pp. 341–358.
- 〈39〉 黒格爾『歴史哲学』上海書店出版社、二〇〇六年。(Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, 1899, 邦訳「ゲル」『歴史哲学講義』上・下、長谷川宏訳、岩波文庫、一九九四年)

参考文献

- 帆特南『讓民主轉起來——現代意大利的公民傳統』江西人民出版社、二〇〇一年 (*Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, 1993)

- 辺燕傑、丘海雄「企業の社会資本及其功效」『中国社会科
 学』二〇〇〇年第二期
 陳曉運、張文傑『鄉村有效治理——廣東範例』印刷版、二〇
 一九年
 埃莉諾・斯特羅姆『公共品的治理之道』上海三聯書店、二〇
 〇〇年 (Elinor Ostrom, *Governing the Commons: The Evolution
 of Institutions for Collective Action*, Cambridge University Press,
 1990)
 弗蘭西斯・福山『信任——社会道德与繁荣的創造』遠方出版
 社、一九九八年 (Francis Y. Fukuyama, *Trust: The Social
 Virtues and the Creation of Prosperity*, The Free Press, 1995)
 弗蘭西斯・福山『大分裂——人類本性与社会秩序的重建』中
 国社会科学出版社、二〇〇二年 (Francis Y. Fukuyama, *The
 Great Disruption: Human Nature and the Reconstitution of Social
 Order*, Profile Books Ltd., 2006)
 喬万尼・卡波齐亞著、馬雪松訳「制度何時大頭身手——歴史
 制度主義与制度変遷的政治分析」『国外理論動態』二〇一
 〇年第二期 (Giovanni Capoccia, "When Do Institutions 'Bite'?
 Historical Institutionalism and the Politics of Institutional
 Change," *Comparative Political Studies* Vol. 49, No. 8 (July
 2016))
 孫中山『三民主義』一九二四〜一九二五年編集・印刷、上海
 紅十字歴史文化陳列館所蔵
 K. Baldwin, "Elected MPs, Traditional Chiefs, and Local Public
 Goods: Evidence on the Role of Leaders in Co-Production from
 Rural Zambia," *Comparative Political Studies*, 2019, 52(12), pp.
 1925-1956.
 Lily L. Tsai, *Accountability without Democracy: Solidary Groups and
 Public Goods Provision in Rural China*, Cambridge University
 Press, 2007.
 Malvish Shanni, "Connectivity, Clientelism and Public Provision,"
B. J. Pol. S., 49, 1227-1250, Cambridge University Press, 2017,
 First published online 4 October 2017.
 Mark Dinecco and Yuhua Wang, "Violent Conflict and Political
 Development over the Long Run: China versus Europe," *Annual
 Review of Political Science*, 2018, 21, pp. 341-358.
 S. N. Eisenstadt and Louis Roniger, "Patron: Client Relations as A
 Model of Structuring Social Exchange," *J. Comparative Studies
 in Society and History*, 1980, 22(1), pp. 42-77.